



碗箱と碗

大平碗  
(上と右2点)

飯碗と汁碗



汁碗



膳と碗



平碗



飯碗

汁碗

壺碗

平碗



飯茶碗 (磁器)

## 寄贈資料の中から 碗

今回は、資料の中から碗を紹介します。碗というのは汁物やご飯などを盛る食器で、形状に丸みと、深さを持つのが特徴です。碗に似たものはかなり古い時代から使用され、皿とよばれていました。平安時代には土器や陶磁器、漆器、金属器など様々な材質のものが使用されています。少なくとも平安時代後期には碗とよばれ、庶民の間でも漆器の碗が使われました。また、蓋付きのものは御器といいます。江戸時代に入ると産業が発達し、各地で漆器が生産され普及しました。

室町時代に本膳料理が確立した後に、飯碗、汁碗、壺碗、平碗は同色同素材で統一したものが膳に組まれるようになりました。飯碗と汁碗にはそれぞれ飯や汁物を盛ります。蓋は小型で飯碗の方が汁碗より大きく、対で使用します。汁碗と似たものに吸物碗というものがあり、これは酒と合わせて使われます。壺碗は煮物

などを盛るもので、口が小さく深さがあります。平碗は平たく大きい碗で、煮しめを盛ります。どちらも蓋が碗より大きいのが特徴で、胴体には加飾挽きという、木地を削って装飾を施したものが多くあります。大平碗は直径20～25cm程の大型の平碗で、二の膳において、煮しめなどの盛り合わせに用います。

江戸時代初期に国産の磁器がつくられ、幕末頃に庶民にも陶磁器が普及すると、汁碗以外は、次第に漆器に替わり磁器が用いられるようになりました。また、それまで茶の湯で茶を飲用する器を茶碗とよんでいたのが、陶磁製の器のことを指すようになり、区別するために陶磁製の飯碗を飯茶碗とよぶようになりました。

一般に昭和20年代頃までは、冠婚葬祭などの際に漆塗りの膳と碗が使用され、旧家や町内などで大量の膳碗を所有し、貸し借りが行われていました。

## 駿河湾の漁

金指 貢さんの漁話  
オイベッサンを祀る 恵比寿講

2018年2月3日より企画展「いのりの海 国指定漁具コレクション信仰・儀礼用具」が始まりました。本展では、船霊や大瀬神社といった漁師が大漁と海上安全を祈願してきた神や仏などを紹介しており、漁師やその家で行ってきたいのりの姿を見ることができます。

金指貢さんが親や先輩から伝えられてきた漁師の信仰に関するお話も本展やその図録にたくさん掲載致しましたが、掲載しきれなかった部分も多く、今号からは、そうしたものを含めて金指貢さんが語る漁師の信仰について取り上げていきます。

オイベッサンとは恵比寿のことを指しており、農家では田の神として、商家では商売繁盛の神として祀られています。大漁祈願をはじめ、正月に行われるノリゾメ（乗り初めフナイワイとも）やフナオロシ（船下ろし）の時など、漁師が何かにつけて参拝に訪れる三嶋大社も恵比寿を祀っています。

金指家では神棚とは別に恵比寿を祀る棚が設けられており、そこに恵比寿・大黒天・達磨が祀られています（写真1）。毎月一日や正月三が日には、他の神棚と同様にオヒカリ（火を灯した蠟燭）が供えられます。

年に一日だけ、恵比寿が主となって祀られる日があります。それが恵比寿講です。静浦地区では10月20日、内浦・西浦地区では月遅れの11月20日に行う家が多いですが、江浦のように漁師の家の恵比寿講は一般の家と区別して10月19日に行うところや、志下のように旧暦の10月20日と正月に祀るところがあります。内浦三津にある金指家では11月20日が恵比寿講を行う日とされています。



写真1：金指家の恵比寿・大黒天を祀る棚

恵比寿講の日の夕方には恵比寿・大黒天・達磨を棚から居間の机の上に下ろします。机の上には柿・みかん・オヒカリなど様々なものが供えられます（写真2）。中央にあるカケウオは腹合わせにした2尾の魚で、赤い魚が良いとされています。この年は赤いオニカサゴが供えられました。そして恵比寿と大黒天のそれぞれの前に各種の料理が供えられます。毎年欠かすことができない料理として、タキオコワと豚汁とカキナマスと煮物があります。タキオコワは小豆が入ったご飯ですが、赤飯とは違って蒸かさず、釜で炊いて作ります。カキナマスは大根と人参を皮むき器で搔いたものを使った紅白のなますで、焼いたサバをほぐしたものと和えられています。煮物の品数は奇数が選ばれ、この年に行われた恵比寿講では昆布巻き・人参・椎茸・こんにゃく・里芋の5品が使われました。昆布巻きの中にはサバをすりつぶしたものが入れています。かつてはこれらの料理をオブッキという折敷の上に載せられた皿に盛られていました。オブッキの置き方も決まっており、折敷の継ぎ目のない方を恵比寿・大黒天に向けて置きます。これらの供物の他にも枡の中に1万円札を2、3枚入れて供えられていましたが、現在は行われていません。恵比寿と大黒天に供えられた料理と同じものを家族で食します。ただし、カケウオはその日に食さず、そのまま供えられます。この日は正月に購入して片目を入れていた達磨に1年の無事を感謝してもう一方の片目を入れる日とされていました。そして、一晩、机の上に置かれた状態で祀り、翌朝には元の棚に戻されます。

かつては静浦地区や内浦地区にある各網組で盛大に恵比寿講の宴会が行われていましたが、現在では行われなくなってきています。また、金指家のように各自の家で現在も恵比寿講を行っているところは少なくなってきました。

（話：金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住）



写真2：金指家の恵比寿講のお供え

## 地図から見た沼津④「沖ノ島（狐島）と登り道」

加藤 雅功

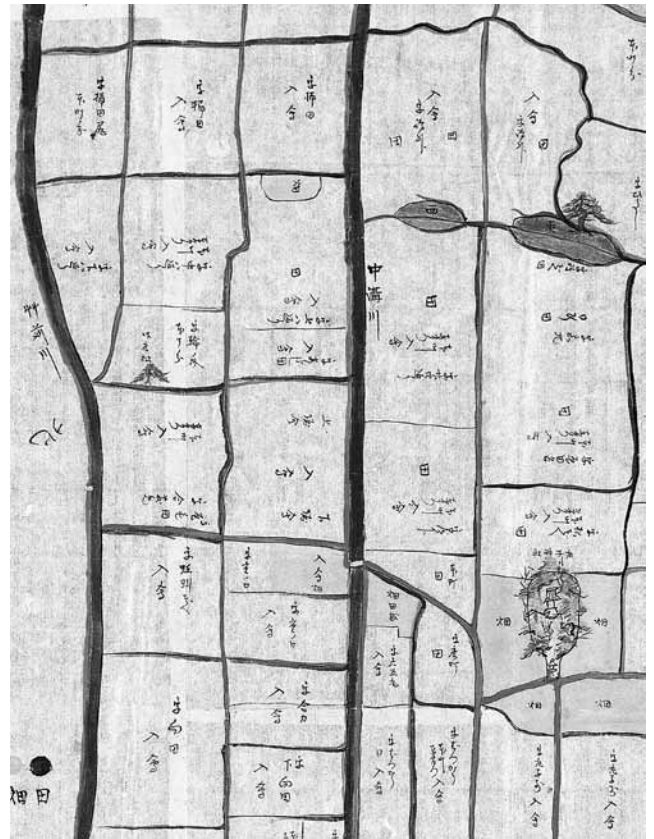
今回は天保6年（1835）の『本町野方絵図面』や天保8年（1837）の『沼津本町絵図』などを紹介したい。  
**沖ノ島（狐島）と沼津新田** かつて東間門村は西間門村と同様に愛鷹山の百沢のうち、東熊堂地内を流下する谷戸沢（現谷戸川）から用水を引いていた。灌漑水路の草刈川（古くは草苅川）河畔に位置した旧字輪ノ内の「御座松」は西間門村との境を示す傍示の松と思われるが、その東側には谷戸沢の分水の中溝川が流れる。古代の条里水田の方格状の整然とした土地割を示す「中溝耕地」は一ノ堰で分水する中溝井組からの呼称で、より東側は整然さを若干欠く中に、特異な島状の土手が東西2町余りにわたって延びていた。

『本町野方絵図面』では「沖之島」とあり、字東と字西に分れた土手状の微高地は「草刈場」と記されている。また、『沼津本町絵図』では「狐島」とあり、凡例は「草木」で、屋根を葺く茅や飼料用の稈（飼い葉）の採草地であった。沼川分岐点の又井から分水する草刈川は、入会地に多い葦や茅などの草木を刈る「草刈場」に因む命名で、沖ノ島の西側の畑地は旧字「上八通り」（後の上中溝）の微高地である。

明治5年（1872）の『駿河国駿東郡東間門村縮図』では、沼津本町との入会に東間門分として、東・西の表記がある島状の地があり、東側の高まりに独立樹の松が描かれている。島状の堤は丸子神社の真北、5町余の位置で、北側は「嶋外」の入会地で、古くは「島外浸」の排水不良地で、変形の土手が圍繞していた。より北側や西側は旧字「西阿原地」（後に阿原）、東側は後の字「ひたし」入会地で、ともにアール（芦原・荒原）の泥質・泥炭質や砂質の開墾地で、下々田が大半であった。なお、葦は刈り取られ、堆肥に利用された。

用水掛りは黄瀬川の牧堰からの本町溝（大溝）の「登道用水」（下流は子持川）で、西側の沼津本町分として、東西9町、南北4町ほどの広大な原野がかつて存在した。地形的には「馬の背」の微高地で、水掛りの悪い日損田と思われ、この西阿原と東阿原との中間に「沼津新田村」の集落があり、元禄以前に成立した新田開発の対象地であった。市道（五反田）と根方の東沢田方面とを結ぶ「新田道」が中央に通る沼津新田には「愛鷹神社」（村方持ち除地）があり、今は本字田町（現本田町）の「三神社」に合祀されている。

丸子神社のほぼ北に位置する沖ノ島（狐島）は、砂質土壌の土手の高まりから、原地区の男鹿塚・女鹿塚（雄ヶ塚・雌ヶ塚）の景観が浮かぶ。浮島ヶ原の沼沢地とは異なる高燥地（黄瀬川扇状地）の中に孤立して、東海道から見ての沖の島で、草刈りの有用な地で、草木が生えて狐が棲息するような地形環境である。



駿河国駿東郡東間門村縮図（北半部）

（明治5年 明治史料館保管東間門田中家文書 沼津市史別編絵図集から転載、右下 丸子神社旧社）

ランドマーク（陸標）の「土手の古松」は、境界に絡む傍示の松と推定される。明治5年（1872）の地図では沖ノ島に古い、大きな枝振りの良い松があった。この場所はその後、東京人絹沼津工場（後にフジクラ沼津事業所）の敷地内となり、削平されてしまった。同様な一本松は沼津新田（現本田町）の北側、字中ノ坪（東沢田分）と字塚田（中沢田分）間の境界部、新田道の1町西側寄りに、かつて傍示の松があった。「古道」と「登り道」 東間門の「御座松」は高貴な人に関わるか、御座の重ね合わせた形状に因むかと思われる。古道近くのより西側に位置する、西間門の字神明や字北島付近は古い集落跡とされる。東海道以前の中世の古道が推定され、字神明には古く神明神社があり、かつて榎の古木があった。西寄りの旧松長村の「松長新田」も同様な中世の集落跡として、両方を結んで古道とする説がある。しかし、低湿地側に隣接する位置に加えて、近世の新田開発に関わり、地形環境のほかに居住の永続性やルート面で無理が生じる。

また、『沼津本町絵図』に描かれた独立樹の大松から、丸子神社の前と脇を通る点より、古道沿いの一里塚と推定する人さえいた「御座松」も伝承が残らない。絵図に描かれていた松は、その後の明治5年の地図では格段に松が小さく、塚も描かれていない点から一里塚の対象から外した。

一方、沼津の浅間神社へ明治10年（1877）に遷座した旧丸子神社も、東海道から離れている。『延喜式』の「神名帳」記載の式内社に比定されている古社の丸子神社は祭神として金山彦命を祀り、東間門の旧村社であった金山神社も祭神が金山彦命で、同じ信仰圏にあった。その後、丸子神社は国常立命を合祀している。

丸子神社の北西寄り、中溝川沿いに沼津本町分の字下道（古くは二十四通）があり、中沢田側から東間門への南北にわたる「下り道」を指す。東側の道を「上り道」とも表記した結果、二次的に発生した。2つの道の間が「登道耕地」で登道用水の灌漑による条里水田の方格状の整然とした土地割を示す。

なお、沼津新田への道は「登り道」ではなく、元々「新田道」と呼んでいた。西側には「登堂之坪」（後の中登り道）、東側には「登堂坪」（後の白銀）があった。

「幟所」、「幟道」の字も当てられ、「登り堂」が「幟所」や「幟道」へ、さらに「登り道」と転化した。本来は幟の立てられたお堂に起源の可能性が高い。通りの西側の字塚田には細長い塚を、字法性寺には小さな稲荷を、天保の絵図に見るが不祥である。

愛鷹山麓の「根方」の集落とを結ぶ南北の道は、ほかに大字上土・三枚橋の境界部の延長で、東熊堂分に字中道があり、かつて「中道」と呼んだ可能性がある。東側の大字高田・三枚橋・日吉との境界部には字造り道があり、岡宮の浅間神社と平町の日枝神社（山王社）とを結ぶ「山道」で、成立が新しい故か「造り道」の字名が残る。西側の大字上土・本町から西熊堂・東沢田の境界部は「根方道」と呼ばれ、七反田から東熊堂・西熊堂の大字境、熊野神社横を結ぶ県道162号の前身の道も「根方道」と呼ばれた主要道であった。

## 資料館からのお知らせ

### 企画展「いのりの海」開催

2月3日から5月6日まで、本年度の企画展として「いのりの海」～国指定漁具コレクション 信仰・儀礼用具～を開催しています。

国の重要有形民俗文化財に指定されている館蔵の「沼津内浦・静浦及びその周辺地域の漁撈用具」の中から信仰・儀礼用具を中心に紹介するもので、危険と隣り合わせの海上の営みの中で、その安全と大漁を願う漁民の信仰の姿に迫ろうとするものです。

特に、和船作りの技術を伝える船大工が姿を消していく中で、最後の機会になるかもしれない「船霊様」の製作過程の記録写真の展示や漁師の家に祀られていた「御札」から遠近の社寺の信仰の広がりを紹介しています。

貴重な資料を展示していますので、是非ともご覧いただきたいと思います。



企画展「いのりの海」の展示風景

### 体験学習の紹介



天秤棒を使った水運びの体験の様子

資料館では、小学校の社会科見学や生活用具の見学に合わせて、昔の生活を体験することができます。

今のところ、天秤棒による水運びや火打石による火起し、石臼による粉挽きなどを体験することができます。事前予約が必要です。

### 沼津市歴史民俗資料館だより

2018. 3. 25 発行 Vol.42 No.4（通巻217号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: [cul-rekimin@city.numazu.lg.jp](mailto:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp)